懐袖雅物

藤森大雅（大節）
FUJIMORI Hiromasa（Daisetsu）

拙論は扇面を題材とした作品制作論である。はじめに扇面の概要を示しておこう。扇面は本来、面を覆う、またはあおいで風を送るための実用品であるが、開閉できるものとできないもので区別される。開閉式のものを扇面、摺扇（しょうせん）、撒扇（さんせん）、便面などといい、日本では扇（おうぎ）や扇子と呼ばれている。平安時代末頃と推定される「扇面法華経冊子」は下絵を施した扇面料紙に「法華経」が書写されたもので、扇面に書画が書かれた遺例として有名である。扇面の起源は日本にあり、その後、朝鮮半島を経由し、宋代の頃、中国へと伝わった。

一方、開閉式ではないものを団扇（だんせん）、紈扇（がんせん）といい、日本では団扇（うちわ）と呼んでいる。こちらは中国で古くから使用され、後漢の『説文解字』や揚雄『方言』に記載が見える。円形の骨に薄絹や紙を表と裏から貼り合わせたもので、放射状に広がる骨がある日本の団扇と作りが異なっている。円形の他、方扇、六角扇など、形の種類が多いのも特徴である。中国では東普の王羲之が竹扇に文字を書いた逸話[1]がある。扇に文字を書いた最古の例として知られているが、扇子が中国に伝わる以前であることから、実際に書写したのは団扇であったと推測されている。

扇子は宋代に中国に伝わった後、明代中期頃になると盛んに書が揮毫されるようになる。この形式は文人達の間で好まれて定着し、以後、様々な表現が展開されていく。これは明末清初の長条幅とともに、書の形式に大きな変化をもたらせた。紙面の大きさとそれに伴う表現の広がりという点から見れば長条幅に劣るのは否めない。しかし、小さな紙面だからこそ表現できる雅趣とそれまで大多数を占めていた方形とは異なる紙面の面白さは扇面特有のものである。

続いて、扇面の書式について確認しておきたい。扇面の形状は大きな円の一部のようになるため、上部は広く、下部が狭い紙面となる。また、扇子には放射状の骨があり、その数は少ないもので九本、多いもので四十本と多様である。多字数を書く場合は骨と骨の間を

行に見立てることが多く、文字数に応じて骨の数も考慮する必要がある。

扇面の書式は二～四文字の少字数と漢詩などの多字数に分けられる。少字数の場合は右から左へ一字ずつ配置し、最後に長文の落款を書き添えることが多い。この場合、骨を行に見立てる必要はないため、骨をまたいで文字を書くことになる。時に筆先が骨にあたって生じる節筆が、独特な視覚的効果を演出する。一方、多字数の場合は上部の文字はやや大きく、下部の文字はやや小さめに書く。そして文字は全体的に上部に配置し、下部を空けることが一般的である。また、例えば七言詩であれば、一、三、五行目は四字、二、四、六行目は三字といった具合に、奇数行と偶数行でそれぞれ決まった字数を書くのが通例である。これにより下端の文字が混み合うという構成上の欠点を補い、紙面全体の調和を図ることができる。

以上の書式に留意し、唐代の詩人、高適の七言絶句「除夜作」を楷書で扇面形に制作した。扇面形は扇面の形に整えた紙のことで、骨が無い分書き易いが、行となる目印も無い。まず鉛筆で割付を行った。使用した紙面の横幅は上端が五十四㎝、下端が二十四㎝である。最初の余白を一行目、最後の落款を十行目と仮定し、これを均等に割り付けて何枚か書いてみた。書き終えて割付の線を消すと、前半と後半部分の行の傾斜が強く感じられ、どうも落ち着かなかった。そこで、一～四行目と七～十行目の角度をやや立てるよう調整することにした。具体的には、五、六行目の間を紙面の中心に据えて、一、十行目のみ上端五㎝、下端〇㎝に設定し、その他の行は上端五・五㎝、下端三㎝に設定した。前後半の行の角度を立てたため、最初の割り付けに比べて右から左への視点の移動が自然になったと感じられた。この微調整は骨の有る扇面ではできないことである。

以上の割付に従い、各行を四字、三字に配字した。上部は文字を大きく、下部はやや小振りに引き締め、その中でも文字の大小に変化をつけることを意識した。こういった作品は特に率意が大切で、習気が感じられると面白みに欠けてしまう。なるべく書き込まず、新鮮な気持ちが薄れる前に書きあげたいという思いがあった。手元にあった七枚の色紙をすべて使い、その中でも比較的伸び伸びと爽やかに書けた一枚を選んだ。筆は知人から譲り受けた李鼎和精選「漢璧」、墨は鈴鹿墨の「鶯里墨」、紙は以前中国で購入した扇面形の色紙を使用した。

数年前から小作品を書く機会が増えたことをきっかけに、これまでに書いていない形式にも積極的に取り組むよう意識している。扇面は形状そのものに動的な要素があり、行書きでありながら散らし書きをしているような不思議な感覚におそわれた。

「懐袖雅物」は懐や袖に忍ばせた風雅な品物という意味で、中国

のサイト「百度」には扇子の別称[2]とある。書に限らず、詩や画を創作する場として明代の文人達から愛好された扇面は、日本が発祥でありながら、実用性と芸術性を備えた中国の伝統の中で発展した特殊な形式であり、文人の文化を象徴するものである。先人達の扇面作品を鑑賞すると、その重みを実感せずにはいられない。扇面を興に乗じてさらっと書けるようになるのはまだまだ先のことであろう。

高適「除夜作」
筆：李鼎和精選「漢璧」
墨：鈴鹿墨「鶯里墨」
紙：中国製
サイズ：本紙寸法20.8cm×46cm
色紙寸法27.2cm×48.4cm

【注】

（1）虞和『論書表』に「旧説羲之罷会稽、住蕺山下。一老嫗捉十許六角竹扇出市。王聊問、一枚幾銭。云、直二十許。右軍取筆書扇、扇為五字。嫗大悵惋云、挙家朝餐、惟仰於此、何乃書壊。王云、但言王右軍書、字索一百。入市。市人競市去。姥復以十数扇来請書。王笑不答。」とある。

また、北宋の蘇軾にも扇面に文字を書いた逸話が伝わるが、使用したのは王羲之と同じく団扇であろう。

（2）https://baike.baidu.com/item/%E6%80%80%E8%A2%96%E9%9B%85%E7%89%A9 参照。

本紙寸法：20.8cm×46cm
色紙寸法：27.2cm×48.4cm

旅館寒燈獨不眠、
客心何事轉凄然。
故郷今夜思千里、
霜鬢明朝又一年。